

祈祷会奨励 「逃れる道」

コリントの信徒への手紙一十章十三節

重信安俊

二〇〇八年三月に月末までには退院できる予定で手術のため入院した時のことです。

病室で読むために、ただ一冊、淀川キリスト教病院名誉ホスピス長 柏木哲夫先生の著書「心をいやす55のメッセージ」を持って行って、一日に一メッセージずつ読もうと計画をたてていたつもりです。

このテキストは、二〇〇七年一〇月に、はじめた「入門の会」のテキストとして用いられていたものです。

このテキストの各メッセージの最初には、聖書からの御言葉の引用があり、教会の説教と異なるのは、その御言葉の「解き明かし」ではなく、それから著者が教えられたことの「信仰上の体験」がテキストの中心となっていました。

「入門の会」では、すでにメッセージ・一四まで進んでいましたので、それから先を読んでいた。

私が前から服用していた薬が、麻酔薬との副作用があるとのことで、予定日より一週間手術日が延期になりました。

メッセージ・三二まで進んだ時に、暗唱できるようになっていたはずの「主の祈り」ができなくなっていたことです。メッセージ三二とは丁度、手術日延期が決まった日のことです。そこでマタイによる福音書六病院に届けてもらうことにしました。

メッセージ・三二は、「最大の試練」という見出しで、文頭には、創世記二十二章一～三節の「アブラハムがイサクをささげる」場面が用いられ、文の後半に、先程読んでいただいた、コリントの信徒への手紙十三章十三節が引用されています。

テキストは新改約聖書が用いられていますので、もう一度テキストの引用の聖句を新改訳聖書で読んでみます。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実なかたですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐える事のできるように、試練とともに、脱出の道も備えて

くださいます」(新改訳)

手術日が再設定された日は、私自信四月の計画があり、家族においても今までと状況と異なることになった矢先の異変で戸惑いがありました。四月に予定していたことが思っているとおりに片付くか?ということです。このことは、後になって考えると、「手術」ということを通じて、私の「自己中心的」であることに対する罪が暴かれたのです。それにも況して、「主の祈り」が口からでてこないことです。

私にとって「逃れる道」「脱出の道」とは、聖書を身近に置くことでした。 「手術」ということを通じて、神が私に論されたのだと思います。手術を待つ一週間、病室でテキストの「新改訳聖書」のみ言葉と、家から届いた「新共同訳聖書」を読み比べてすごしました。

「試練」の大小は、人にとって色々あると思わざるをえませんが、私にとっての一つの試練は、計画のすべてがストップされたことよりも、祈りの言葉も忘れさせられたということと今は思っています。

今までも、検診を勧めて下さったF先生と執刀医のN先生に感謝します。

最後に詩編の一節を読んで終わります。

「主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。」(詩編三七編二三節)